

豊川市南部地域の古墳の動向

岩原 剛

1. はじめに

本稿で対象とする豊川市南部地域は、海浜部の旧宝飯郡御津町域（現豊川市御津町）を中心に、豊川市西部の国府町周辺や豊川市に接した蒲郡市東端部の大塚地区までを含む範囲とする。蒲郡市大塚地区はかつて、旧御津町の赤根地区と同一の地区として扱われたところでもある。この範囲には古墳時代の首長墓が点在し、政治的な展開が把握しやすい小地域でもある。

筆者は、三河地方における後期古墳群の展開についての解釈を行う中で、東三河地域では豊川市北部、豊橋市北部、同東部を取り上げた（岩原 2020）。以下では前稿の補完を目的に、三河地方の古墳時代史の解釈の一端として、古代の調査成果を踏まえながら地域の評価を進める。

2. 旧地形の復元（図1・2）

豊川市南部地域は段丘の発達した北側、丘陵の発達した西側、沖積低地が広がる東側に大きく分けられ、沖積低地は三河湾に接している。市街化が進むほかは、北側や西側は古代以前から地形的な変化はない。その様相が激変したのは東側の沖積低地と三河湾沿岸の海浜部である。

海浜部は豊川市御津町域であり、御馬、浮野（なぎの）、西方（にしかた）、上・下佐脇（さわき）などの集落が存在する。この付近の地形を見ると、砂堤や砂堆上の御馬や西方、上・下佐脇の集落が沖積地や埋立地に囲まれて存在し、付近を音羽川や御津川が南に貫流して三河湾に注いでいる。これは近世以降の土地開発を受けた姿であり、かつての地形は当然異なる。

延享3年（1746）の「三河国宝飯郡御馬村下佐脇村論書立会絵図」によれば、御馬の引馬神社付近から幅100mほどの砂堤が、南南東に1kmほどに渡って伸びており、これを「安礼乃崎」と記している（久曾神 1967、御津町史編さん委員会 1990）。「安礼乃崎」は万葉集にも現れる地名であるが、重要なのはかつてこの砂堤に沿って入江が存在したことである。御津山の麓を流れ、そのまま南下し三河湾に注ぐ御津川は、現在この砂堤を分断して河口になっており、これは後世の開削による河口であろう。そして本来の御津川はこの砂堤の内側に沿って流れ、周辺に沖積地を形成した。また御馬と西方、下佐脇に囲まれた広い沖積地には音羽川や佐奈川が流れ込み、砂堤・砂堆に囲まれた内部はかつてラグーン（潟湖）を形成していたと考えられる。

さらに久曾神昇は「三川藻塩草」にある安礼乃崎の記載について、「古東西に入江ありて、その中央の出崎なれども」の文章を引用している（久曾神 1967）。これがいつの時代を指すものかは明らかではないが、付近に御津川と音羽川ほかで形成された潟湖が2か所あったことを推定させ、西方の地名は東の潟湖に対する「西潟」であり、かつて2つの潟湖が存在したことをものがたる。そして2つの潟湖は砂堤沿いに東流する御津川の旧流路で繋がっていたと考えられる。

東の潟湖は、西方や下佐脇の砂堤・砂堆よりも三河湾側に広がっており、古墳時代にはさらに北側にも展開していた可能性がある。そもそも「佐脇」の地名は波が立ち海鳴することを語源としており、かつて下佐脇の砂堤・砂堆よりも北に条里遺構が存在した（歌川 1984）ことを考えると、古代から中世には沖積地化が進み、条里を基軸とする開発が進んだのだろう。また音羽川はもとは国府が所在する白鳥台地の南側を西から東に向け貫流しており、河口付近は古代には国府外港の役割を担ったと推定されている（藤岡 1964）。

また西の潟湖は「浮野」の地名にあるように、砂堤に囲まれた穏やかな水域だったと推定され、式内社御津神社の存在や「船津」の地名から、古来港津として活用されたと考えられる。東西2つの潟湖で形成された港津こそが、古代以前の海浜部の姿であろう。

3. 豊川市南部地域の主要古墳とその変遷（図2・3）

豊川市南部地域は、北部地域に比べて群集墳が発達する地域とは言えないが、前方後円墳を主とする首長墓が存在する地域であり、潟湖を見下ろし、望むようにして立地する。発掘調査が行われた古墳の数は少ないが、以下に現時点で判明している事実と評価を紹介する。

①丸山古墳（蒲郡市大塚町）

三河湾に面した小丘陵の頂部に存在した。削平などの造成によって地形が改変されたが、発掘調査で周溝の一部が検出され、全長40mほどの前方後円墳と考えられている（松田2016）。

周溝からは、転落した葺石に混在して埴輪片が多数出土している。多くは円筒埴輪及び朝顔形埴輪片で、わずかに切妻造の家形埴輪片が含まれていた。円筒埴輪は黒斑があり、中央をわずかに窪ませたやや高い台形の断面形を呈した突帯を有し、外面調整はタテハケの後にA種ヨコハケを施したもので、築造時期は古墳時代の中期初頭、前方後円墳編年の5期に位置づけられる。

東三河地域における中期の臨海古墳として、極めて重要な古墳である。

②船山1号墳（豊川市八幡町）

古代の主街道である東海道と二見道（後の本坂道）に近く、国府や国分僧寺・尼寺が近在する白鳥台地上に所在する全長95mの大型前方後円墳である。近年、周辺開発に伴う発掘調査が進み、前方部・後円部ともに葺石を伴う三段築成であること、くびれ部は両側に造出が存在し、南側の造出には土製模造品（食物形）が供献されていたこと、前方部の盛土は土塊積み技法によることなど、畿内の大型古墳と遜色の無い優れた首長墓であることが判明している。築造時期は埴輪や発掘調査の成果から須恵器の陶邑編年のTK208～TK23型式期、中期後葉に比定される。

船山1号墳は、東三河で最初にして最後の中期大型首長墓であり、倭王権との直接的な関わりの中で出現した古墳であることは疑いない。三河地方の大型首長墓はこれを境に西三河から東三河へと主体が移るような見かけ上の動きがあり、船山1号墳を築いた首長の出現は、東西三河地方全体を見据えた中での政治史の一大画期と目される。

③久保古墳（豊川市八幡町）

船山1号墳から南東に100mほどの白鳥台地上に所在する古墳で、直径20mの円墳と推定される（前田1989）。墳頂には横穴式石室の天井石と考えられる片岩の扁平な石材が2枚存在し、さらに1枚が近在の久保神社社務所前に移設されている。墳丘に葺石・埴輪は見られない。また出土遺物がまったく無く、古墳の時期を推定するのは困難であるが、天井石が扁平な形状から中期の堅穴系主体部、または後期前葉の堅穴系横口式石室の可能性はある。

なお、白鳥台地の南端には滅失した前方後円墳（白鳥古墳）が存在したという（前田1989）。

④御津船山古墳（豊川市御津町広石）

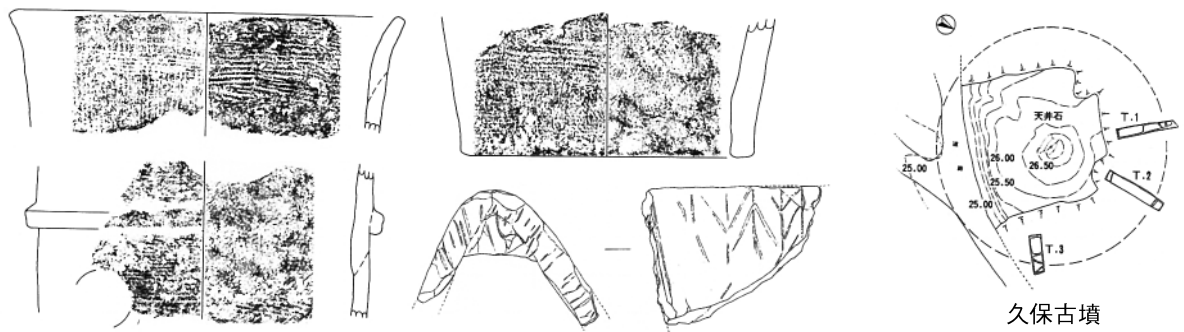
丘陵裾のなだらかな斜面に立地した全長37mの前方後円墳で、過去の地積図から周溝が存在したことが分かる。発掘調査が行われていないため、主体部の形状は不明である（小笠原1990）。

かつては築造時期が中期末から後期前葉と幅を持って考えられていたが、早野浩二が近年行った現地踏査により、淡輪系埴輪を有することが判明した。築造時期は、類似した石堂野B遺跡出土埴輪の年代から、陶邑編年のMT15型式期、6世紀前葉と考えられている（早野2016）。

⑤笹子古墳（蒲郡市大塚町）

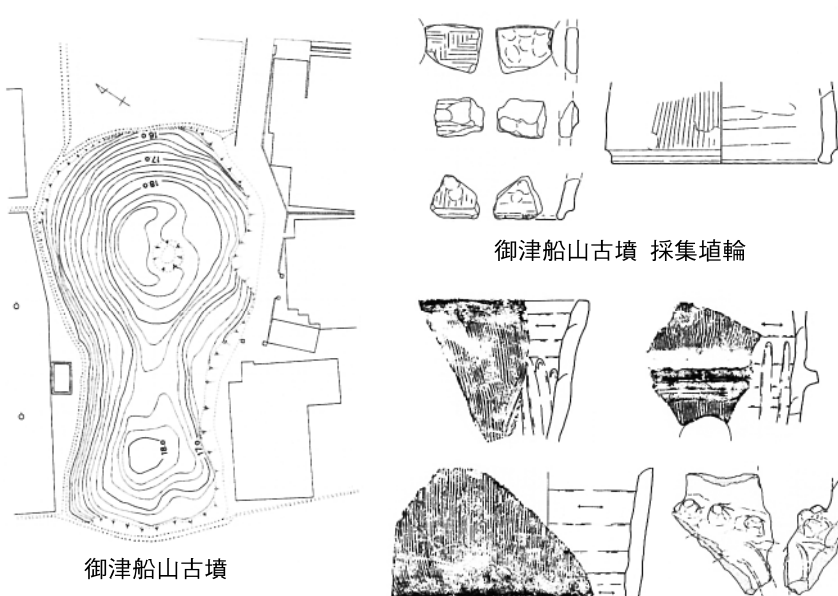
三河湾を間近に望む丘陵上に所在した古墳で、明治時代の開墾と昭和40年代の造成により滅失したため詳細は不明だが、主体部は横穴式石室であったとされる。出土遺物は東京国立博物館に収蔵され、須恵器や玉類が存在する（小笠原2006）。中でも装飾付脚付長頸壺は、鳥鈕蓋を伴う四連の短頸壺を附属した極めて特殊なものであり、古墳の優れた性質が推定される。

装飾付脚付長頸壺は猿投窯系の製品で、H-61号窯期（陶邑編年のMT15からTK10型式期）に比定される。また、過去に須恵質の埴輪が採集されているという（鈴木徹氏のご教示による）。



丸山古墳 出土埴輪

久保古墳

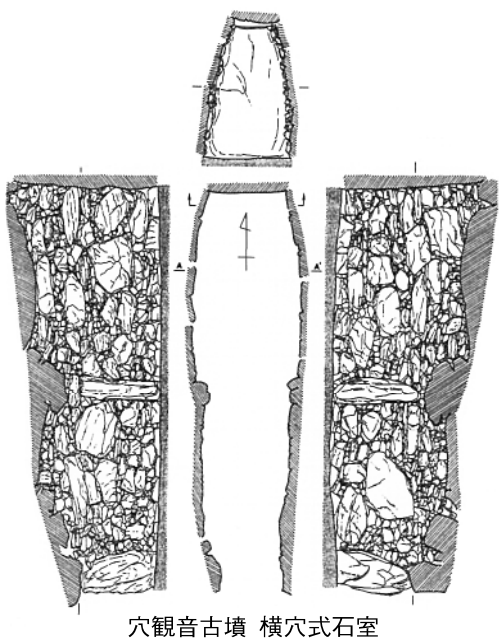


御津船山古墳 採集埴輪

御津船山古墳

赤根天王山古墳 採集埴輪

笹子古墳
出土須恵器



穴観音古墳 横穴式石室

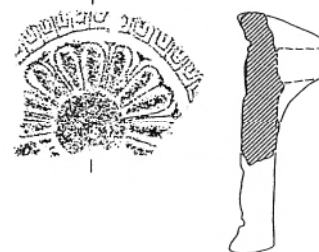
紀寺式



石川寺式



医王寺廃寺跡 採集瓦



弥勒寺跡 採集瓦

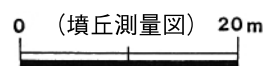
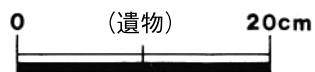
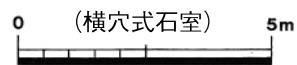


図3 豊川市南部地域の考古学的成果

以上から古墳の築造時期は後期前葉から中葉と考えられる。

⑥赤根天王山古墳（豊川市御津町赤根）

秀麗な姿の御堂山から南東に伸びた丘陵上に所在する前方後円墳で、全長約 35 m である。古墳の至近を流れる紫川の河口の西側に丸山古墳の所在した小丘陵がある。開墾された際に埴輪等の遺物が出土した。現地には 1 m 前後の石材が集積しており、主体部は横穴式石室であろう。墳丘は前方部が南東に向いており、石室は北西方向に開口したと考えられる（註 1）。

出土遺物には円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物埴輪がある。このうち円筒埴輪は外面がタテハケのち C 種ヨコハケ、底端部はヨコナデまたはケズリ調整で、尾張系埴輪に該当する（鈴木 1993）。本墳は東三河地方で最終段階の埴輪を保有する古墳であり、現地で見られる石材の大きさから、横穴式石室としては新しい要素を認めて良いと思われる。したがって古墳の築造時期は陶邑編年の TK10 型式期、後期中葉と捉えておきたい。

⑦穴観音古墳（豊川市御津町豊沢）

丘陵の先端に立地する直径 20 m、高さ 4 m を測る円墳である。発掘調査によって、三段の外護列石が存在すると判明した。主体部は発達した羨道を持つ、もしくは複室構造の三河型横穴式石室で、奥壁と玄室（後室）の天井石に 1 枚の巨石を使用している（小笠原 1990）。

副葬品が出土していないため築造時期は不明確であるが、石室の構造は 6 世紀末葉に位置づけられる豊橋市馬越長火塚古墳よりも後出的であり、7 世紀初頭から前葉と考えられる。

⑧国府古墳群（豊川市国府町）・石堂野 B 遺跡（豊川市御津町広石）

いずれも埴輪を有する小規模な古墳群で、いわゆる初期群集墳に該当する。

国府古墳群は丘陵上に築かれた 10 基からなる古墳群で、1 号墳のみが発掘調査された。1 号墳は直径 10 m ほど、高さ 1.5 m の小規模な円墳で、主体部は石室ではなく縦穴式の礫槨と報告されている。出土遺物として主体部から大刀と勾玉が、墳丘から円筒埴輪と須恵器が出土している（豊川市 1955）。円筒埴輪は一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケのもので、淡輪系もしくは尾張系のいずれかは判別できない。供伴した須恵器の坏身・坏蓋は陶邑編年の MT15 から TK10 型式期のものであり、築造時期は後期前葉から中葉に位置づけられる（鈴木 1989）。

石堂野 B 遺跡は、発掘調査で古墳に伴う周溝の一部が検出され、削平された 10 ～ 15 m ほどの円墳もしくは方墳が存在したと判明した。埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪で、底部に段を有する淡輪系であった。埴輪の特徴から、築造時期は陶邑編年の TK47 型式期を上限に、MT15 型式期に並行すると考えられ（早野 2016）、古墳の築造時期は 6 世紀初頭から前葉であろう。

このような横穴式石室を持たず、埴輪を保有する初期群集墳は豊川市域ではほかに上野古墳群があり、豊川右岸ではいくつか認められる。一方、左岸の豊橋市域では埴輪を保有する例は今のところ見あたらず、対照的な様相である（註 2）。

以上から、首長墓群の築造には時期差が認められ、時期が離れた丸山古墳を除けば単系列での把握が可能であると考えられる。すなわち、

丸山古墳・・・船山 1 号墳（TK208 ～ TK23）→（白鳥古墳？・久保古墳？）→御津船山古墳（MT15）→笹子古墳（MT15 ～ TK10）→赤根天王山古墳（TK10）→（+）→穴観音古墳（7 世紀初頭から前葉）→（久保古墳？）

の順である。もっとも、発掘調査が行われていない中で御津船山古墳と笹子古墳、赤根天王山古墳の時期差は微妙で、6 世紀前葉から中葉にかけては地域内に複数の首長が併存した可能性がある。

4. 古墳の動向とその解釈

この地域の首長墓は、臨海の丸山古墳から始まる。中期初頭に位置づけられ、東三河地方では前期前葉（3世紀後葉）の豊橋市市杵嶋神社古墳に次ぐ海浜部の首長墓である。同時期に西三河地方では、三河湾から伊勢湾を越えて伊勢との関わりを持つ有力首長墓である全長95mの前方後円墳・正法寺古墳が海浜部に築かれており、丸山古墳の被葬者はその傘下の首長と見なされる。

その後、時期において全長95mの船山1号墳が突如として出現する。船山1号墳は、被葬者と倭王権との深い関わりを示す大型古墳であり、その出現は地域の論理だけでは理解できない。そして船山1号墳の後、継続的に首長墓が築かれ続ける。

後期前葉から中葉に築かれた御津船山古墳、笹子古墳、赤根天王山古墳は、いずれも40m以下の小型前方後円墳であり、船山1号墳との規模の違いは隔絶している。地域勢力の著しい減退のように見受けられるが、後期前葉から中葉にかけて東三河地方では豊橋市三ツ山古墳（全長37m、TK47～MT15）や豊橋市弁天塚古墳（全長43.5m、MT15）など40m前後の小型前方後円墳が通例であり、各地期の権力が均衡した本来の地域の姿に戻ったと言い換えられる。また、これら3基の首長墓はいずれも埴輪を有する点も注意すべきで、埴輪出土古墳が少ない東三河地方にあって、安定的に採用された地域と言い換えることができる。この時期には石堂野B遺跡や国府古墳群のように、初期群集墳にも埴輪が採用されている。

穴観音古墳はやや時期において築かれた首長墓で、東三河の同時期の首長墓と同じく複室構造もしくはそれを意識した単室構造の三河型横穴式石室を採用している。築かれた7世紀初頭から前葉は豊橋市北部に首長墓が集中しており、馬越長火塚古墳の出現以降に東三河地方の権力を掌握した豊橋市北部勢力の傘下に組み込まれた首長であったと推定される。

ここで久保古墳の位置づけが問題となる。前述したように中期から後期前葉に遡るのであれば、船山1号墳と御津船山古墳との間をつなぐ可能性がある。一方、葺石や埴輪が見られない点から後期でも新しい段階、かりに終末期であれば、地域首長の始祖の墓と目された船山1号墳の権威を借りた、原点回帰的な性質を有する古代の首長とも解釈される。

そしてこれらの古墳を脈絡付けるのは、港津の存在である。現在の三河湾の海岸線から最も奥に位置する船山1号墳で直線距離にして4kmほどであり、想定される潟湖からは音羽川と直結して3kmほどである。2つの潟湖を取り囲むようにして首長墓群が展開する状況は、潟湖が古墳時代の重要な港津として機能し、その周辺に首長居館や経済的な拠点が存在したことを容易に推定させる。また潟湖の周囲には原東海道や万葉集の「二見道」にも比定される本坂通（姫街道）、国坂峠を越えて西へとつながる道などが集中しており、古墳時代においても交通の拠点であったと考えられる。

5. 古代の遺跡の展開

この地域は、国家主導の三河国府・国分僧尼寺が設置されたところである。在地勢力に関係する古代寺院として弥勒寺跡（平松1999）、山ノ入遺跡（斎藤ほか1985）、伊知多神社遺跡（前田2010）があるほか、東に離れて医王寺廃寺跡（鈴木1992）がある。いずれも十分な発掘調査が行われていないため詳細は不明ではあるが、医王寺廃寺は伽藍を備えた地域の中核寺院であり、ほかには山林修行などを目的とする山林寺院や山房的な小規模寺院であったと考えられる。すなわち山林寺院は個別の地域権力を檀越にして設けられ、中核寺院は豊川右岸の広域の首長たちによって共同で支えられた古代寺院と解釈される。さらにこの地域は国家によって国府と国分僧尼寺が設置され、古代においては重層性をもって仏教文化が浸透した地域であり、中央からの思想や文化がいち早く取り入れられた、「開かれた地域」であったと評価できる。

古墳時代においては船山1号墳以降、中央政権との関わりを積極的に評価する材料に恵まれていないが、律令期の状況から決して低調であったとは言えないだろう。古代寺院が乏しい豊川左

岸に比較すればその差は歴然としており、医王寺廃寺跡や弥勒寺跡の紀寺式や石川寺式の畿内系軒丸瓦（図3）の存在は、国府や国分僧尼寺設置の前段の動きとして無視できない。

なお、医王寺廃寺はこの地域から東に離れて豊川沖積地に望む段丘の端に立地する。付近には円墳もしくは前方後円墳の五社稲荷古墳や糟塚古墳などが所在し、別系譜の首長墓が築かれたと見なされる。これら首長墓は継続性が無く、先に挙げた豊川市南部の首長墓の系譜よりも安定性に欠けている。この首長が単独で医王寺廃寺の檀越を務めるのは難しいと考えられ、医王寺廃寺を広域の首長達が支えたとした根拠のひとつである。

6. まとめと豊川市南部地域の評価

豊川市南部地域にはじめて首長が出現するのは丸山古墳を契機にする。この首長は、古墳の立地から港である潟湖の西岸を拠点にし、三河湾の海上交通と深く関わる人物であったと推定される。つまり、海との深い関わりの中で古墳時代中期初頭に地域が発展し、潟湖が港として整備されはじめ、地域権力を生み出したと評価される。これは西尾市正法寺古墳の出現と同じく三河湾・伊勢湾の海上交通網整備と連動した事象であり、地域開発のきっかけと見なされる。

その後、中期後葉の船山1号墳まで間をおくため、直接的な系譜をひく関係にあったかどうかは明らかにしがたいが、船山1号墳は内陸の陸上交通路を意識した立地であった。出現には倭王権の強い協力と後押しがあったと推定され、東西三河地方全体の画期となりうる事象である。そして船山1号墳は音羽川を介して河口の潟湖である港とも直結している。まさに王権の権威を背景に陸海の主要な交通路を制したことを暗示させる、大首長が出現したと評価できる。

しかし、この権威も単発で終わったようだ。その後、後期前葉は港である潟湖を拠点にした地域権力として、40 m以下の前方後円墳を次々に築く。単系列、あるいはさらに地域を分ける複数系列の首長が存在した。これは東三河の広域に出現した地域首長たちの権力が均衡していることを示しており、本来の東三河地域の基本的な地域権力のあり方であったと言えるだろう。それは後期末葉の豊橋市馬越長火塚古墳という大首長墓の出現前夜であり、船山1号墳と馬越長火塚古墳という、倭王権との関わりの中で生まれた2つの大首長墓に挟まれたはざまの時期である。

その後、7世紀に出現する穴観音古墳は大型の三河型横穴式石室を有する典型的な東三河地方の首長墓であり、被葬者は豊橋市北部勢力の傘下にある有力な地域首長であった。三河湾に面した港津としては、後期前葉以降に顕在化した奥渥美湾沿岸地域があり、この地域には倭王権との太いパイプをものがたる金銅装製品の副葬が集中する（岩原 2015）。東三河の玄関口である港としての役割は、古墳時代後期に豊川市南部から奥渥美湾沿岸へとシフトしていった観があるが、穴観音古墳の規模からは、豊川市南部地域の政治権力が著しく低調になったとは思えない。その背景として、豊川左岸にある豊橋市北部勢力の権力の伸張により、同じく豊川左岸域である奥渥美湾沿岸地域の首長たちは、王権からきめ細やかな配慮がなされることになったと考える。

その後、豊川市南部地域における東三河の海の玄関口としての地位は、大宝2年（702）の持統天皇による三河行幸の上陸地となった（久曾神 1967）ことから盤石になる。ここと中央との関係は、古代寺院の展開や国府・国分僧尼寺の設置からも明らかであり、後者は国家主導のプロジェクトとして災害を受けにくい安定した地形で、かつ交通の要衝である台地上が選ばれた。これにより、豊川市南部地域は「国府の外港」としての地位を獲得するのである。

7. おわりに

豊川市南部地域は、古墳の数こそ決して多くは無いが、東三河地方では古墳時代中期から港津を拠点に開発が進んだと見なされる場所である。その後の古代寺院や三河国関係施設の設置という歴史的な展開を見ても、魅力にあふれた三河地方の重要地域であり、さらなる調査研究の進

展が期待できる。本稿がこの地域への関心をさらに高めるきっかけになるなら幸いである。

本稿を執筆するのにあたり、鈴木徹氏から数々の有益な助言を受けました。ここに記して感謝いたします。最後に、稚拙かつ些少な内容ではありますが、豊川市の文化財保護に大きな足跡を残し、昨年惜しくも急逝された平松弘孝君に本稿を献呈いたします。

(豊橋市文化財センター所長)

註

1 赤根天王山古墳は後円部の北西から北側が削られており、巨石が集積している。これほどの大きさの石材が掘り出されたにもかかわらず、くびれ部付近の墳丘は荒れていないので、横穴式石室は前方部側ではなく北西側に開口すると判断した。東西三河地方では、後期前葉から中葉の無袖形石室に北西に開口するものが見られ、本墳はこれと矛盾しない。さらに、同時期の無袖形石室としては石材が大きすぎる感があり、時期が新しい要素と見なされる。また現地の石材に矢穴が見られ、近世に採石を目的に掘り出されたと考えられる。不要な天井石や奥壁などの大型石材が残された可能性があるため、現時点の形状は不明としておく。以上は筆者の現地踏査の見解による。

2 豊川に臨む豊橋市の吉田城址では発掘調査で埴輪片が出土しており、左岸の段丘上にも削平された同様の初期群集墳が存在した可能性はある。ただし近年発掘調査が進む豊橋市の牛川西部地区では、5世紀後葉から6世紀前葉の方墳(方形周溝墓)群が検出されているが、埴輪は皆無である。

引用・参考文献

- 岩原 剛 2015 「東三河における古墳時代海浜集落遺跡の特質」『三河考古』第25号 三河考古学談話会
- 岩原 剛 2020 「三河における後期古墳群の理解に向けて」『三河考古』第30号 三河考古学談話会
- 歌川 學 1984 「三河国の条里制－東三河地方における条里制の遺構－」『三河遠江の史的研究』歌川學遺作集刊行会
- 小笠原久和 1990 「船山古墳」「穴観音古墳」『御津町史』本文編 御津町
- 小笠原久和 2006 「第1章第3節 古墳時代」『蒲郡市史 本文編1 原始古代編・中世編』蒲郡市
- 久曾神 昇 1967 「万葉集「引馬野・安礼乃崎」考」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第12輯 愛知大学
- 斎藤嘉彦ほか 1985 『山ノ入遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会
- 鈴木 徹 1992 「医王寺廃寺跡」『古代仏教東へー寺と窯－ 1. 寺院編』東海埋蔵文化財研究会
- 鈴木 徹 2000 「愛知県宝飯郡御津町赤根天王山古墳の形象埴輪－東三河地域における尾張系埴輪の採用－」『埴輪研究会誌』第4号 埴輪研究会
- 鈴木敏則 1989 「三河の埴輪(1)」『ホリデー考古』第8号 ホリデー考古刊行会
- 鈴木敏則 1993 「三河の埴輪(3)」『三河考古』第5号 三河考古刊行会
- 早野浩二 2016 「東三河の淡輪系円筒埴輪－豊川市石堂野B遺跡出土円筒埴輪の再検討－」『研究紀要』第17号 愛知県埋蔵文化財センター
- 平松弘孝 1999 「弥勒寺の古瓦」『三河考古』第12号 三河考古刊行会
- 藤岡謙二郎 1964 「古代東海三国の地域中心と国府の調査－参河・遠江・駿河の場合－」『立命館文学』第223号 立命館大学人文学会
- 穂積裕昌 2008 「伊勢・志摩・熊野と海人の考古学」『海人たちの世界－東海の海の役割』中日出版社
- 前田清彦 1989 「I 位置と環境」『船山第1号墳発掘調査報告書』豊川市教育委員会
- 前田清彦 2010 「伊知多神社遺跡」『愛知県史 資料編4 飛鳥～平安』愛知県
- 松田 繁 2016 「第6章 丸山古墳」『愛知県蒲郡市 埋蔵文化財発掘調査報告書』蒲郡市教育委員会
- 御津町史編さん委員会 1990 『御津町史』本文編 御津町